

詩篇 84 篇

気分転換のために買い物をしたことはありますか。自分の気分を良くするため、あるいは人生の中の何かを祝うために、最後に買ったものは何でしたか。もしストレス解消のために買い物をしたことがあるなら、あなたは一人ではありません。2023 年に行われた全国調査で、女性の購買習慣について尋ねたところ、日本人女性の約 60%が、リラックスする方法として買い物をすると答えました（チル消費）。¹残りの 40%の人たちは、「リテール・セラピー（買い物療法）」やチル消費以外の選択肢を選んだのでしょうが、誰しも時々ちょっとしたご褒美をもらおうと気分が良くなる、という点では同じだと言えるでしょう。

このようなリテール・セラピーについて、あなたはどう思いますか。その根底には、買い物をしたり物を購入したりすることで、自分の欲しいものを手に入れ、感情的な高揚を得る、という考えがあります。これは年齢や性別、社会的・経済的背景を超えて当てはまるものです。買い物が好きかどうかに関わらず、多くの人は「物を手に入れることで気分が上がる」ことを楽しみます。では、その核心には何があるのでしょうか。なぜ人は気分転換のために買い物をするのでしょう。買い物は、どのような感情的欲求を満たしているのでしょうか。

現実的に言えば、強いストレスを感じているときに、おそらく最もすべきでないことは外に出てお金を使うことです。アメリカのある調査では、感情に影響されて買い物をしたと答えた 63%の人のうち、実に 74%がその購入を後悔したと答えています。つまり、「気分を良くするための買い物」は、そもそもその行動を促した感情的欲求を満たしていないのです。リテール・セラピーとは、ストレスの感情を麻痺させたり、しばらく問題から目をそらしたりする方法にすぎません。確かに、一度問題から離れて、後で新しい視点をもって向き合うことが健全な場合もあります。しかし現実には、多くの人が、買い物によって人生の課題に取り組むための新しい見方を得るのではなく、むしろ後悔を抱く結果になっているようです。

同じことを別の角度から考えてみましょう。あなたは最近、ストレスを解消しようとして、Facebook、YouTube、X (Twitter)、ニュースサイト、Netflix などを開いたことはありませんか。その後、どんな気持ちになりましたか。皮肉なことに、多くの人は Facebook を延々とスクロールしたり、YouTube の動画をまとめて見たりしても、気分が良くなりません。

¹ https://www.soumunomori.com/pressrelease/detail/pr-117799/?utm_source=chatgpt.com

これは私自身の話ですが、そうしたことをすると、もともと抱えていた悩みに加えて、「時間を無駄にしてしまった」という罪悪感まで増えてしまうことがあります。

自分の内側にある不安や苦しみから気をそらす、というプロセスは、本当の意味で気分を良くする方法ではありません。人生を最大限に生きるためには、立ち止まり、何が起きているのかを考え、人生における意味や満足を求める心の渇きを正面から見つめる必要があります。意味や満足を求める探求は、ほぼ確実に「私は誰なのか」「なぜここにいるのか」「人生の目的は何か」といった“大きな問い”へと私たちを導きます。これらの問いは、人生が単に多くの物を手に入れたり、周囲の人から注目を集めたりする以上の、もっと深い意味を持っていることを気づかせてくれるはずです。そして、人生の意味を求める探求は、私たちの目を自分自身から神へと向けさせます。

詩篇 84 篇において、詩人もまた、これらと同じ考えに向き合っていることが分かります。詩人は、神の家の門番であることのためなら、地上のあらゆる成功や力、快樂を手放してもよいと考えています。詩篇 84 篇の中心的なメッセージは明確です。詩人は、神の臨在の中で生きることこそが、人生における最高の善であると描いているのです。聖霊に導かれた知恵のひとつに、詩篇 84 篇は、人類の最も深い必要の一つ——神の臨在の中で生きることへの回復——を私たちに思い起こさせます。詩人の心は、神と永遠に共に住むことができる、回復されたエデンの園を切望しているのです。

興味深いことに、詩篇 84 篇を注意深く読むと、主イエスの姿、そして私たちを神の臨在へと導くその役割が見えてきます。詩人のように、心の最も深い渇きが満たされることを切望する私たちは、同じ場所にその答えを見いだす必要があります。私たちはキリストにあって自分のアイデンティティを見いだし、そうしてこそ、人生における最高の善を本当に求めることができるのです。

詩篇 84 篇で詩人は、新しい住まいを夢見ています。それは神と共に住むことです。彼は全身全霊でそれを慕い求めています。彼はソロモンの神殿の美しさを見て、そこに住みたいと願っています。現代に生きる私たちには、ソロモンの神殿がもっていた、魂が切なくなるほどの美しさを想像するのが難しいのかもしれませんが。多くの現代建築は、美しいとか、超越的な感覚を呼び起こすものではありません。しかし、もし巨大なゴシック様式の大聖堂の写真を見たことがある、あるいは実際に中に入ったことがあるなら、詩人が神殿を見たときの気持ちを想像できるでしょう。彼は主の住まいを「愛すべきもの」と呼び、そこに住む者は計り知れないほど祝福されていると言います。神の住まいにおいては、門番でさえも恵みと誉れを与えられ、良いものが一つも拒まれることはありません。

この神殿への情熱の奥には、神に近づきたいという願いが隠されています。それは 2 節に明確に表れています。「私の心も、私の肉体も、生ける神を慕って喜び歌います」と彼は言います。つまり、神殿が美しいのは、生ける神との結びつきがあるからにほかなりません。ここで強調されているのは、神の臨在そのものの祝福です。

それは、祭壇に巣を作る雀や燕のたとえにも表れています。鳥は究極の自由を持っています。どこへでも飛んで行くことができます。それでも彼らは巣を作り、毎日そこへ帰ります。なぜなら、巣こそが生きるために必要な安全と安心だからです。どこへでも行ける自由や、自分の人生を思いどおりに支配することが、最高の善ではありません。鳥でさえそれを知っているのです。言い換えれば、力を持つことや、常に自分の欲しいものを手に入れることは、神の臨在に住むこととは比べものになりません。本当に「良い人生」「祝福された人生」を生きているのは、主の家に住み、絶えず主を賛美する人々なのです。

この詩のこの部分では、主と共に住み、その祝福を受けるというビジョンがあまりにも美しく力強いため、多くの人は雀のように祭壇に住まいを築く機会があるなら、喜んでそうしたいと思うことでしょう。詩人は、主と共に住むことへの一心な献身と喜びの姿を描いています。しかし、ここで問題があります。どれほど素晴らしく、美しく、喜びに満ちていても、私たちはいつも主と共に住みたいとは思わないのです。最も良いときでさえ、礼拝の中に喜びと意味を見いだすことはありますが、それを常に切望するというのは、多くの人にとって詩的表現に過ぎません。

この詩篇が、人生における最高の善を描くビジョンとして語られていることを、私たちは心に留めておく必要があります。実際、私たちは詩篇 84 篇が描くように、神と共に住むために造られました。それにもかかわらず、ほとんどの時間それを望んでいないという事実は、私たちがどれほど深く墮落してしまったかを示しています。神との正しい関係に回復されたいと願うクリスチャンである私たちでさえ、本当は永遠に神と共に住みたいと「願うべき」だと分かっているながら、いつも神の臨在を求めているわけではありません。不安に満ちたこの世界で生きる私たちは、後片付けをしなくてよい食事や、新しい服、趣味に関する何かを求めてしまうことがあります。

人生の最高の善は神と共に住むことですが、詩人自身も、それを今この地上で完全に味わうことはできないと知っています。詩人の視点は、神殿の前に立ち、そこに入りたいと願う姿から、神殿へ向かう巡礼者の姿へと移っていきます。神殿へ向かう人々は、「涙の谷（苦しみの谷）」（6 節）を通らなければなりません。多くの英語訳では「バカの谷（Valley of Baca）」と訳されていますが、ここには言葉遊びがあります。

ヘブライ語には、語の末尾に来るとほとんど発音されない文字がいくつかあります。「バカ（baca）」という語もその一つで、語末がアレフ（aleph）で終わる場合は「乳香（バルサム）」を意味しますが、ヘー（he）で終わる場合は「泣くこと」や「苦しみ・苦味」を意味します。旧約聖書の中には、これが実際の地名を指している可能性のある箇所もいくつかあります。しかし、詩篇 84 篇における詩人の意図は、5 節と 7 節を見れば明らかです。たとえ今はまだ神の臨在の中に住んでいなくても、私たちの心がそこに向けてしっかりと定められているなら、たとえ苦しみに満ちた長い人生の道のりであったとしても、その歩みは「力に満ちたもの」となるのです。

しかし、またしても問題があります。あなたは、自分の人生が7節にあるように「力から力へと進む」ものだと感じていますか。皆様がどうかは分かりませんが、少なくとも私自身について言えば、物事が正しい方向に進んでいると感じることすらほとんどなく、『力から力へ』と進んでいると感じることはなおさらありません。詩人が描く、エルサレムと神殿へ向かう巡礼者の一心な献身は、私には共感しにくいものです。それは、常に神の臨在を切望するという感覚に共感しにくいものと同じです。

この詩篇を、詩人が神殿で礼拝したいという思いを、感情豊かに誇張して表現したものだとして片付けることもできるでしょう。確かに、少なくとも神殿で神を礼拝したいという思いは語られています。しかし、その言葉にあふれる熱情は、私たちが抱くような一時的で移ろいやすい欲求を比喩的に表したものではありません。なぜなら、それを詩篇 84 篇の解釈として受け入れることはできず、11 歳のときの主イエスは、この詩篇をそのような思いで受け止めておられなかったからです。ルカ 2 章 41～52 節で、イエスは父の家にいるために神殿に残られました。また後に、神殿の境内を商売の場に使っていた人々を、イエスは自ら編んだむちで追い出されました。イエスの心は、詩篇 84 篇が語る神の臨在への熱情で燃えていたのです。

さらに注目すべきは、8～9 節で詩の流れが変わることです。詩人は立ち止まり、神に向かって「あなたの油注がれた者をご覧ください」と願います。これは油注がれた王を指していますが、私たちはそこにメシア——油注がれた方——の姿を見ずにはられません。

この詩篇の焦点が神の油注がれた方にあると分かると、私たちは主イエスを中心にして、もう一度この詩を読み直すことができます。主イエスは、私たちのドゥームスクロール(不安や恐れをあおる否定的なニュースや情報を延々と見続けてしまうこと)やリテール・セラピーでは考えもしないほど、神の臨在を情熱的に求めて生きられました。イエスは神の栄光を直接知っておられ、それを慕い求めただけでなく、「苦しみの谷」——ご自身のエルサレムへの歩み——を通して、力から力へと進まれました。肉体的な弱さの中にあっても、神の道を心に保ち続けられたのです。

神の臨在に一日いることは、他のどこに千日いるよりも良い、と本当に信じることができたのは、誰よりも主イエスでした。サタンに試みられ、高い山で世の国々を支配する機会を与えられたとき、主イエスは、礼拝されるべき方は神おひとりであるとして、それを拒まれました。父なる神の偉大さを、御子ほどよく知っている方はいません。イエスは、神の臨在の外に住むよりも、神の家の門番であることを選ばれたのです。サタンを拝むことを拒んだからといって、イエスがその国々を失ったわけではありません。イエスは父を信頼し、その信頼がもたらす祝福の中に生きておられます。

主イエスは神の臨在の中に力を見いだされました。では、私たちはどうでしょうか。皆さんについては分かりませんが、私自身は、神の臨在を切望する思いにおいても、また 11 節が語るように不敬虔な者の幕屋にとどまらないという点においても、自分が十分ではない

ことを知っています。もしそれが私の力にかかっているのだとしたら、私はきっと失敗してしまいます。しかし、感謝すべきことに、それは私たちに委ねられてはいません。イエスにあって、私たちは新しいアイデンティティを与えられ、それは確かにイエスの上に、またイエスの中に据えられています。エレミヤ 31 章が語る新しい契約——神の律法が私たちの心に書き記され、神と共に住むという現実——は、イエスにおいて成就しました。

イエスは、私たちにご自身に寄り頼むよう招いておられます。信仰によってイエスを受け入れ、聖霊が内に住まわれるようにと招いておられます。私たちがイエスのいのちにあずかるとき、主は、ご自身が墓から出て来られる以前に墓が私たちを縛っていたよりも、さらに確かに、釘跡の残る御手のひらで私たちを支えてくださいます。イエスを通して、私たちは永遠に神を賛美し、神の臨在を恐れて退くのではなく、それを愛することを学ぶようになります。主は、死の陰の谷を歩むための忍耐強い持続力を私たちに与えてくださり、その場所を泉へと変えてくださいます。そして最終的に、私たちは主を通して神を顔と顔を合わせて見るようになります。

今日、皆様がどんな思いで教会に来られたかは分かりません。新しい年が喜びと平安に満ちていると感じているかもしれませんし、すでに去年と同じ悩みや心痛に満ちているかもしれません。しかし、どちらであっても、神の臨在から逃げないでください。神の臨在の中にこそ、満ちあふれる喜びと、毎日を生き抜く力があるからです。私たちは、十分に願ったから、あるいは十分に良い人間だから神のもとに行けるわけではありません。神ご自身が、私たちを神の望まれる者へと造り変えてくださるのです。

どうか今日も、そして毎日、ただイエスのもとに来てください。家に帰るその日まで担ってくださいよう、主に願いましょう。御言葉と祈りを通して、主に近づいてください。

全能の神よ。あなたはご自分の民に対して真実なお方です。祝福された御子、私たちの主イエス・キリストを通して、今日、私たちをあなたのもとへ引き寄せてください。小さな子どものように、あなたの臨在を愛し、近づくことを教えてください。イエスの御名によって祈ります。アーメン。